

箱根の嶺を過ぐ

頼

鶴彦

当年の意気雲を凌がんと欲す

快馬東に馳せて山を見ず

今日危途春雨冷やかなり

檻車夢を揺がして函関を過ぐ

【作者】頼 鴨崖（一八二五〜一八五九年）（文政八年〜安政六年）・幕末の儒学者、志士。頼山陽の三男、三樹三郎とも云う。

父没後、川上東山の訓育を受け、その後大阪江戸に出て昌平黌に入門。弘化三年（一八四六年）退寮後東北漫遊に出松前に渡り松浦武四郎と交歓する。ペリー来航後尊王攘夷論を唱え、国事に奔走し、梁川星巖、梅田雲浜らと謀議画策した。安政の大獄に際して安政五年（一八五八年）十一月捕らえられた。翌年江戸に送られ評定所糾問のち死罪となる。

【語釈】*檻車（かんしゃ）：囚人を乗せた車や籠生年

【通釈】若かりし頃、この箱根を越えるのに、馬上に鞭をあげて雲間を一飛びに越えたものであるが、今日の旅は捕らわれの身で、春雨も冷たく、我を乗せた籠は、昔抱いた理想と共に箱根の関所を越えて行く。